

國學院大學學術情報リポジトリ

井上紅梅筆下の中国江南における語り物と芸人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 良和, Kikkawa, Yoshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000220

井上紅梅筆下の中国江南における語り物と芸人

吉川良和

はしがき

井上進が紅梅の筆名で上梓した『支那風俗』上中下巻は、当時の上海を中心にした江南の「飲む・打つ・買う・食・芸能」と、その内容は「大道楽」の多岐に亘っていて、中国人の庶民生活に密着した情報が満載されている。とくに筆者の興味を惹いたのは、民国十年（一九二一）出版の下巻に「支那講談」（二三三頁）と題して、それまでの江南の語り物について述べている一章である。芝居と違い、外国人が主として聴覚だけを頼

りに異国の聴覚芸能を鑑賞することは、極めて難しい。当時、中国に居住する外国人で、それも方言の話芸を味わえる者は、僅少であつたはずだ。地方劇も方言だが、扮装し仕草があるから、はるかに理解しやすい。話芸はまず当地の常識、風俗・習慣、なによりも現地の方言を解さねばならない。そして、俗語・諺・洒落言葉を知つてこそ、響きの良い美声を楽しめる。約百年前、そうした中国の庶民文化に切り込んで、一人の日本人が地方話芸の世界を記述したことに喜びを覚えるのである。話芸は音楽と同じ聴覚芸術に属すが、その地域にしか通用しない地方性聴覚非文字文化で、いわば地域に閉ざされた芸能で

ある。反面、その地域の者は誰しも享受できる。それは不斷に音声言語のあらゆる可能性を發展させてきた。とりわけ往時において、人々はそれで言語生活を豊かにし、社会常識や処世術をも学んだ。それ故、話芸の芸人を「先生」と称し、庶民には人生の教師の役割も果たしていた。

さて、井上紅梅が述べているのは、評話（講談）と弾詞（浄瑠璃・浪花節の類）、すなわち蘇州を発祥地とする「評彈」と総称される、中国を代表する語り物の諸事である。紅梅が記した民国初期は、すでに上海に進出して隆盛期にあった。それで、紅梅も興味を懷いたのだろう。同時に、この時期は以後の評彈の錚々たる名人上手を輩出する黄金時代以前に当たる。彼は評彈の専門家ではないので、歴史的なことや専門的事柄は、なにか参考にしたものがあつたはずだ。明確に判るのは、「説書閑評」（一九一九）で、その一部から引いて翻訳している。要するに、参考書と自分の見聞した情報を根拠にし、さらに自分の評を加えているのだが、重要なのはそれが当時のある程度共通認識であつたろうことだ。そこにこの「支那講談」の価値がある。音声言語芸能は文字と違い、現実に対する細かい観察と思考を経て、多角的に微に入り細を穿つた言語の妙を、饒舌に尽くすことが可能である。蘇州の説書（後述）はとりわけ優

れていると定評があり、これぞ文字に無縁の民衆の言語生活を育んできた非文字文化の精髓の一つといえる。だが、文字で中国文化を受容してきたわが国では、中国の非文字文化に対する研究が必ずしも十分とはいえない。とりわけ、話芸のような音声言語芸能の研究はなおざりにされてきた。そういった状況から、紅梅の記述は日本人が正面から全面的に書き及んだものとして、大いに意義深い。

昨今の評彈研究には、やはり中国大陆の歴史観や価値観という節に掛けられている可能性もある。その点、この史料は当時の評彈界と利害関係のなかつた異国人紅梅の書いた、民国初期の評彈界の一面・裏面を知る貴重な一次史料としての意義を有している。拙稿は、近年の研究成果や芸人の回想の客観的な記述を参考に、紅梅が当時知り得た評彈に関する情報の整理、意味する内容、誤りの訂正などを行わんとするものである。

当時、語り物は江南で「説書」と称した。この「書」は「物語」と「物語る」という双方の意味をもつ芸能用語である。そこで、舞台は「書台」、話芸は「書芸」、演目は「書目」、一席は「一回書」、代演は「代書」、作るのは「編書」、業界は「書壇」等々である。知識人を「読書人」というが、物語を聴くことは「聴書」で庶民が読書同様に情報を得る手段であつた。拙

稿では、演ずる場所「書場」、語ること「説書」という語を、そのまま使用する。紅梅の稿は、校正が不十分であったのか、誤字・脱字・宛字があり、また中国語のルビは呉語訛りの発音を基礎に振っている。だが、拙稿では明らかな誤字も、紅梅の原文・原語・（ ）内の割り注とともに特に太字で表記し、拙稿の文と（ ）は細字で区別した。予めご理解願いたい。

一 上演場所について（原題「寄席と藝人」）

二 四頁

紅梅はまず、書場を紹介する。曹鳳漁によると、評彈の本場・蘇州では、茶屋の喫茶室に舞台を設けて演じ始め、後に朝は喫茶だけで、昼と夜の二部に分かれて語られた。⁽²⁾ 大きな所は二百人余り、小さい所は百人弱が聴いた。当初は従業員が入場料の銅銭の孔に鉄の細棒を通して集めたが、やがて書場名と番号を記した竹の細棒「竹籤」を入場券としたという。⁽³⁾ 上海のお茶屋の喫茶軽食の「茶楼書場」、説書専門の「清書場」、さらに十数台のベンチを並べる、露天の語りもあった。⁽⁵⁾ それとは別に、屋敷などに招かれる「堂会」がある。客層が上流階級なので、卑猥な言葉、下品な芸や筋道の通らない説書はできない。⁽⁶⁾

紅梅がいうように、祝儀は書場の四分の一増しだったから、堂会は芸人にとってご褒美の品も貰えるありがたいものだった。

その他に、紅梅が挙げる「新世界」や「大世界」など、二十世紀の上海に現れた遊園地や百貨店内の演芸場での上演がある。倪萍倩は芝居から演芸をやる総合娯楽場を「遊芸場書場」と称する。そこでは、「揚州・鎮江の六書（揚州彈詞？）」「紹興の平調（紹興平胡調のこと）、晚清に流行した語り物）」や「北京の樂子（恐らく「彩扮蓮花落」のことだろう。銅銭付きの竹棒と小ドラの伴奏で簡単に扮装する「にわか芝居」の類だろう。）、」「天津の太鼓（正確には「大鼓」と書き、太鼓を打ちながら主に大三弦を伴奏に演唱する。天津だけでなく北京も有名）」など、よそから上海に來た聴衆にも各地の語り物を聴かせた。「灘簧には蘇州・上海・寧波の三種あつて一組、五名乃至七名で高坐上り筆、琵琶、調板（カスターネット）、胡弓などを賑やか囃し、囃し止んだ時には男女の身振りや声色をつかひ、諧謔を交じえ」と、流行していた「灘簧」の形態を紹介している。紅梅がまず総合演芸場を挙げたのは、純粹書場が日本人には敷居が高かったため、自身もよく通っていたからだろう。

倪萍倩はさらに「上海書場發展概況」⁽⁴⁾で、禁止された阿片吸

引場を改業した「搶鋪蓋書場」、下層民の廉価な「翻牌書場」、娼妓の素語り場を改業した「清唱書場」等々と、書場を分類している。

さて、紅梅は一九二一年までの上海の書場を二十六軒挙げているが、その営業地点を紅梅の当時と倪萍倩の現今の地名を並記し、また倪の分類法で分けてみよう（番号は紅梅が列挙した順番、（ ）内は『評彈文化詞典』⁸附録「上海書場」覽表」P 453～461（以下「表」と簡写）に出ている営業年間と地点を示す）。

〔茶樓書場〕

9 ▼聘樂園（福州路 青蓮閣後 西合興里・福州路）（一八七五年～一九〇八年）

13 ▼小雲台（広東路恭順昌街・福建路）（一八七五年～一九〇八年）＊小雲台は光緒年間からあり、移転した可能性がある。

17 ▼鳳鳴園（新閘路―派克路口・新閘路）（一八九〇年～一九八五年）＊倪萍倩と「表」（新閘路二四八号）は同じ地点で「鳳鳴台」とする。

24 ▼第一樓（城内邑廟後）＊倪萍倩が清代からの旧書場と

し、地点を「九畝地」と記したのを「表」と照合すると「第一層」が目に入り、そこには（一八八九年以前～一九二〇年以後）と営業年を記し、さらに地点を「清代からの旧書場。南市邑廟後側九畝田」とあるから、「第一樓」の誤写であろう（「地」と「田」は上海語音が近似）。

〔清唱書場〕

8 ▼樓外樓（湖北路―南京路口・南京路）（一九一一年～？）（九江路湖北路口）＊「表」では「遊芸場書場」に入れている。

15 ▼文明滙泉樓（福建路聚星・福建路）（一八九〇年～一九六二年）

22 ▼春風得意樓（邑廟内・邑廟）（一九〇八年以前～一九六一年）（豫園路二六八号）

23 ▼康園（城内福佑路十七号・福佑路）（一九一八年頃）＊倪萍倩は「康樂」とするが、「表」は「康園」で住所も同じ。

25 ▼群賢百花樓（城内豫園・邑廟豫園内）（一九一八年頃）＊倪萍倩は一九三〇年以降に「百花庁（新城隍廟）」を挙げているので、あるいは本来の「群賢」の後身か。

〔清唱書場〕

11 ▼飛丹閣 (福州路—胡家宅・福州路) (一八九〇年頃)
* 「表」では石路 (福建中路) とある。『上海案内』⁷⁾ にあった「小広寒」は挙げられていない。

〔槍鋪蓋書場〕

10 ▼一言樓 (広東路—浙江路口・六馬路) (一九〇〇年—一九〇八年) (北海路)

〔遊芸場書場〕

1 ▼大世界 (愛多亞路・延安中路) (一九一八年—一九六六年) (西藏南路一号) * 「表」では七か所で南北の語り物を上演したとある。

2 ▼新世界 (泥城橋・西藏路) (一九一五年—一九三六年) (大馬路廣洽卿路口・南京路西蔵路口) * 「表」では「玻璃花園書場」という名で座席は二百。

3 ▼小世界 (城内邑廟・福佑路) (一九二三年—一九三一年) (南京東路広西路口) * 「表」では、ここでも南北の語り物が上演した。座席は約二百。開業を二三年とあるが、紅梅が言及しており、二一年以前は確かである。

4 ▼先施公司樂園 (大馬路・南京路) (一九一七年—一九五五年) (南京東路六九〇号) * 「表」では、百貨店中の書場で、ここも南北の語り物を上演した。

5 ▼永安公司娛樂場 (大馬路・南京路) (一九一八年—一九五九年) (九江路金華路口) * 「表」では、百貨店の中の書場で「天韻樓」と称す。上海の一人芝居「独脚戲」が主だが、評弾も上演していた。座席は四百。上海で始まった遊芸場書場は客寄せのため、一演者一演目では時間を埋められず、初めて数人の数演目制が常演されるようになったという (注4 「上海書場發展概況」p. 249)。

倪萍倩の表には光緒期から一九三〇年代初期まで、九十一軒の書場名が列挙されているが、以下の書場は含まれていないので、上掲の「上海書場一覽表」を参考に再度見てみよう。但し書場の分類はせず、地点の確認のみに止める。なお、この表には年代があるから、参考のために太字の紅梅が挙げた書場の後に附した。

6 ▼新留春園 (漢口路小花園内) * 周玉泉の師匠張福田が一九一三年頃に四馬路の「留春園」に出演したとある。

7 ▼喜春堂 (漢口路—浙江路東)

12 ▼喜春園 (福州路平安南里) * 「表」では、喜春台とあり、営業は一九一八年前後、地点は福州路浙江路口とあ

る。喜春堂か喜春園か未詳。

14 ▼申園（山西路定安里口）（一九〇〇年〜？）＊「表」では（山西路安定里）。

16 ▼里群覽太和書場（楊樹浦太和街）（一九一八年頃）＊「表」は「里」がないが、同住所。

18 ▼吉祥軒（新聞橋路―新聞路北）（一九一八年頃）＊「表」と同住所。

19 ▼天泉富貴樓（公館馬路・金陵東路）＊「表」に富貴樓があつて四馬路（今の福州路）（一九〇八年前後と記すが、位置が違ふので「天泉」を付けたのだろう。

20 ▼如意樓（公館馬路）（一八七五年〜一九一八年頃）＊「表」は（公館馬路・金陵東路）

21 ▼聽雨樓（邑廟豫園内）（一九一八年頃）＊「表」と同住所。

26 ▼協記西書庁（大東門内彩衣路）（一九一八年〜一九三〇年頃）

＊紅梅は「團體と學校」の節で、「天外天」を出している。「表」（p 475）では、「遊芸場書場」〔漢口路浙江路口〕（一九一六年前〜？）とある。

書場は劇場と違い、設営が簡単だから、民国以降、盛んになつた上海では、数多く出現したので、とても書き尽くせないだろう。ただ、紅梅が生活した当時の書場を挙げているので、記録しておく価値は充分ある。因みに、演者の出演料を、一席「七元六角から九元六角位まで」で、堂会は「別に三元の増金」と記している。

二 弾詞演目と演者（原題「世話物脚本」）

四〇九頁

まず、評話と弾詞の違いを説く。歌入りの「弾詞」には「開篇」なる短編の歌もあるが、双方ともに長編が主である。だから、紆余曲折のある話を、時には数か月にも及んで口演する。例えば六十回書なら、昼夜二回で二か月語る。そこで、評話なら「三国読み」「水滸読み」芸人がいる。弾詞も同様で数少ない演目を練り上げて各席の話を連鎖させ披露するのである。歴史物の講談は「評話」や「大書」といい、世話物の弾詞を別に「小書」とも称す。ともに演者は椅子に坐つて演ずる。

弾詞は本来、琵琶か蛇皮線一挺で弾き語りをする。二十世紀に二人で組む形式が盛んになった。歌が一段落すると、演者は

机に楽器を置き、振りを付けて口演する。その内容は主に男女の愛情に書生の出世話を、喜怒哀楽を織り交ぜたもので、紅梅はこの節を「世話物脚本」と名づけている。

紅梅が第一と挙げたのは、名人・馬如飛の『珍珠塔』である（因みに、紅梅の同書に載せた和訳『珍珠塔』は、語り物の演出本前篇で貴重なものである）。「雅俗を程よく消化して」「此脚本の妙處は唱と白の接續の點に苦心が潜んでゐる」と、しゃべりに近い歌という馬調の特徴をいう。内容は方卿なる書生が祖父・父と讒言に遭い、貧窮生活に陥っていたので、科挙の受験への途中、富裕の叔母を訪ねたら冷淡に扱われてしまった。善良な娘は真珠の塔「珍珠塔」を贈り、叔父は娘との婚約をす。その後、珍珠塔が盗難に遭うなどの波乱があるが、最後は科挙に合格し娘との結婚を果たすという話。旧社会で官僚になる出世話に、儒教徳目が盛られているので、高尚な演目として紅梅も推したのである。だが、建国後の中国では、逆に江蘇巡撫の丁日昌が同治七年（一八六八）明治元年、蘇州で、諸演目の禁演を發令したのに、『珍珠塔』は「禁書」でないばかりか、丁が役所に招いて演じさせたのは、封建道徳に汚染された演目だと批評された曰く付きの彈詞である¹⁰⁾。

紅梅は次に朱寄庵の『西廂記』と顧雅庭の『三笑』を挙げた

後、「其他は餘り取る可きものがない」と言い切っている¹¹⁾。前者は朱寄庵が王実甫の名作雜劇より改作した演目。書生の張君瑞が科挙の試験に赴く途中、寺で宰相の娘鶯々を見初め、寺の西脇部屋「西廂」に泊まる。鶯々が略奪されるのを救った者が結婚できるとの約束だったが、君瑞が友人の力で救ったのに無官のため拒否される。その後、小間遣い・紅娘の機転もあった、紆余曲折の末、君瑞は科挙に合格し最後は結ばれるという、これも書生の出世、恋愛話。

『三笑』は、明代の雜文を下地に、文人・唐伯虎を好色な人物に作りあげ、小間遣い・秋香の気を惹き近づくために三度笑わせるなど、様々な手練を弄する滑稽味満載で、当時有名な祝枝山や文徵明といった文人も配した演目。愁嘆場がないので、慶事に歓迎され、「喜書」の代表作となった。

次に、紅梅は演者に移る。『珍珠塔』について、「惜しむらくは馬如飛以後第二人者の出ずるなく、…遺憾千万である。」と述べているが、業界に入る組合記録「光裕社出道録」¹²⁾に、如飛は光緒五年（一八七九）、最後の弟子の入門を推薦した後、彼の記載がないので、ほどなく歿したと思われる、紅梅がその説書を聴いた可能性は少ない。恐らく彼が聴いたのは、衣鉢を継いだ優れた後継者・王綬（授）卿で、「其唱の文雅なるその白の

謹嚴なる、此人を措いて他になし」と、演唱と台詞・説明の「コトバ」双方の素晴らしさを褒めている。さらに、「王授卿は馬氏の外孫に當るが、馬氏の子馬亦飛が逝いて後、珍珠塔の眞本は悉く彼の手に落ちたのみならず、彼は文學の素養もあるので一字一唱苟もせず、他の珍珠塔を説く者とは同日の談ではない」と、彼の彈詞が教養に溢れているとする。綏卿は一八七四年の生まれだから、紅梅の聴いていた頃、四十代の脂の乗っている年頃だったろう。

綏卿の父・王石泉は馬如飛に才能を買われて娘婿となり、『珍珠塔』を稽古したが、石泉が名を成したのは馬如飛が教えた『倭袍』の方だという。そして、前掲『評彈文化詞典』(附録「蘇州評彈伝統書目歴代伝人系脈表」p 371~372 (以下「系脈表」と簡写))には、綏卿へと姚文卿への二系統を載せている。文卿は既述の「出道録」光緒五年の条に、馬如飛が最後の直弟子として説書界に入れている(注12、p 191)。綏卿はこの年、五歳。外孫ではあるが、説書界入りは一八年後のことで、如飛の芸を修得できなからう。つまり、綏卿は専ら父王石泉に学んだので、『珍珠塔』と『倭袍』双方を受け継いだと思われる。

紅梅は王綏卿の後継者を魏鉦卿としている。鉦卿は「出道録」光緒三十二年の条に王綏卿を師として説書界入りしたから

綏卿の弟子に相違なく、鉦卿が『珍珠塔』を十八番にしたので、やはり、王石泉→王綏卿→魏鉦卿の系統は成立するのである。だが、「濫りに原作を改竄したので脚本本来の色澤を失った。昨年彼が上海へ出た時、餘り人氣が引き立たなかったのも、原因は一に茲にあるといふ噂である」と記すので、紅梅の和訳は改竄以前の脚本として貴重な史料といえる。鉦卿の後が、「目下大世界で演じている楊月槎、楊星槎」の兄弟だという。「常熟評彈史話」¹³⁾に拠れば、父楊鶴庭(亭)は馬如飛の内弟子で、『珍珠塔』を稽古したとあるから、それで紅梅が楊一家の説書は常熟の訛りがあるものの、「馬氏の初年時代に成ったもの」とし、魏鉦卿の改竄『珍珠塔』より良いとしている。

次に朱家莊を挙げて、「彼の父莊蓮汀(艇と音通)は馬氏の養子であつたから、其脚本も正銘疑いなしで王授卿直傳のものと大差ない(上掲「系脈表」p 371に、普通の莊蓮艇で書かれているが、朱家莊の名はない)」としながらも、「唯彼に頭がないので折角の名脚本を活かす力なく、蘇州で半可通の女の聴衆からヤンヤと言はれて満足してゐるようじやあ將來が心細からう」。そして、今日馬如飛の直弟子の「珍珠塔読み」とされるもう一系統の姚文卿の名が出てくる。彼は最晩年の弟子として「出道録」に記載され、紅梅は彼を、「實は如飛が老衰に入つて

から入門したもので、其大半は如飛の大弟子俞蓮生の教授を受けたのである。だから篇中平仄（声調と旋律の合致）の失調が夥しい」と、その正当性を疑っているのも頷ける。因みに、俞蓮生もわずか一年前に師の推薦で説書界入りしたばかりだった。

紅梅が推す二作目は、『西廂記』で、朱寄庵の創作、また、「彼の伯父が之を改刪したので、文情益々妙を加へたさうだ」ともある。彼は名家の育ちだが、「災難に遭つて、家を捨て藝人となつた。故に此書の結構の妙は珍珠塔と伯仲の間にある」と称える。さらに、二人の子、蘭庵・菊庵のいずれも教養高く、「他の藝人の如く下品な商賣氣は微塵もない」と褒めている。「常熟評彈史話」に、兄の蘭庵は「姚民哀」の筆名で小説を書いたと付け加えている。¹⁴

また、「寄庵以外…太倉に時仲漁がある。彼は曾て何許人となを改め、…併し彼の脚本は朱寄庵より剽窃し彼の兄孟詒が勝手に改作したもので、…到底眞の朱本には及ばない」との評である。近年の名人楊振雄「『西廂記』的改編」によると、寄庵が太倉で出演中に時中漁の「偷書」が発覚し、寄庵が「何許人偷我西廂！」と憤怒したので、誠心誠意謝罪して弟子入りを許され、この「何許人（何者）」を芸名としたという。何許人は

「系脈表」p.391に、後編を作ったとある。寄庵の系統は息子の時代で終わり、何許人の弟何可人の弟子が著名な黃異庵で、楊振雄の師に当たる。他の「西廂記読み」謝鴻飛を「逆も問題にならぬ」と酷評している。

三番目の『三笑』は、路工の記述によれば、¹⁶現存脚本は乾隆五十五年（一七九〇）の『姻縁三笑』まで遡れ、その後、彈詞芸人・呉毓昌の改編作『三笑新編』が嘉慶六年（一八〇一）に出版されて、一八年（一八一三）に、さらに光緒四年（一八七八）と刊行されたものが遺存する。¹⁷これは、『三笑』の話が民間に広く長く伝わっていた証拠といえよう。顧雅庭の『三笑』はこの呉毓昌本をもとに、蘇州の文人「江汀山、歐陽春生の兩人が改訂し一字一斟酌、大に工夫を凝した丈けあって、珍珠塔、西廂記と相鼎立する程の立派なものとなった」と、潤色を重ねた作品だという。痾塵（吳中夷）『三笑』源流考¹⁸に引くのも、雅庭の成功は、当時潘府の幕僚であった江聴（汀）山の力だという。上記痾塵の同文（p.241）にはこうある。呉毓昌が惜しまず伝えたので、名人郁懷嘉、王子香、その子・王麗泉、またその子の王少泉と伝わった。その芸の長所は筋道の通っている「書理」だと述べ、さらに、王麗泉が杭州で文学者徐某の加筆・潤色受けたとあり、紅梅の記述時後の一九三〇年代に、

世論は王麗泉の「王派」を『三笑』の正統としたという。

もう一つが「謝派三笑」の系統である。謝品泉・謝少泉の叔父甥を、紅梅は「叔父の藝遠く甥に及ばず。或る人が品泉を評して、彼の聲には麗しい艶はあるが、表情や身振が全く欠けてゐると言った。成程さうだ。試みに新世界へ行つて彼の藝を見れば解る。一度上に現れると、宛ら半身不随の病人のやうになつて了ふ」と、その演技を貶し、甥の少泉を「先ず出の聲から活氣があつて諸謔百出、景情神に入り、誰やらが文状元と尊崇したのは適評である」と褒めている。ただ、王派の「書理」と対照的に、謝派は滑稽を得意とした芸風なので、往々表情・仕草が極端に走ると、芸が「餘りに上滑りである處は瑕だ」と懸念もする。

この少泉は、前掲「光裕社出道録」p193の光緒二十二年の条に師の王麗泉の推薦で説書界入りをしたので、上掲「系脈表」p380の附注にあるように、『三笑』の謝派と王派の融合がなされたのである。才能に恵まれた彼も、一九一六年、四十八歳で夭折した。その後、『三謝以外に三笑を説く者は夏蓮生、夏小蓮、王少泉等二十餘名あつて、孰れも顧氏相傳のものである』という。紅梅は王派と謝派との融合の元を顧雅庭に置いている。因みに、品泉は少泉より八歳年上の叔父で、王少泉の十歳

年上であつた。

その他の演目として、『倭袍首』『玉蜻蜓』『双珠鳳』『武香球』『繡香囊』『小金錢』『猫金鳳』『玉夔龍』『黄金印』『七美縁』『雙珠球』など列挙しているので、当時の流行演目を知る。その中で、『倭袍首』（通称「倭袍」）。王石泉の得意演目で別名『果報録』を挙げて、紅梅は、「長処は：重に下層社会の状況を描寫し微に入り細に入ったものである」と述べ、説書の細やかな描寫力を称えている。これも代表演目である『玉蜻蜓』を、「玉蜻蜓も可成りの秀逸である」としながらも、「要するに思想下劣、唱篇俗惡脚色平板聞くに足らぬ」と評し、「文義や思想から言つても遠く珠塔に及ばない」と難じるのは、放蕩書生が見初めた若い尼に子供を産ませて、自分は寺内で死んでしまふが、その子供が出世するという話で、このような不道德な演目を、紅梅は文義・思想にこだわって蔑んでいる。それでも、この演目の人氣が衰えないのは、言葉の表現の面白さ、曲折豊かな筋立てと心理描寫の細かさであらう。

三 評話の演目と芸人(原題「時代物脚本」)

九く一三頁

紅梅がいう「時代物脚本」は「講談」のことである。ただ、手拭いや張扇を使わずに、普通の扇子とマツチ箱大の四角い、木製か石製などの「醒木」を叩いて口演する。

彼はまず、『三国志』の「三国志読み」から始める。そこで、周派と方派の二系統を紹介し、「周派は周桂笙を宗とするもので現在新世界の黄兆麟が之を説く。方派は方振寰独創に成り、陳壽三国志の上ツ面を剥ぎ取ったようなもので、論理徹底し遠く周派の布置に勝っているが餘りにも正直過ぎ、人の睡りを催さしむる」と、方振寰の講義のような講釈を退屈だとしている。一方、黄兆麟は確かに振寰と異なる。彼の『三国志』の師・許文安も同類だったので、父の黄永年は各人物の表情・演技・声色を仕込み、さらに父の友人で「水滸読み」の何雲飛から得意の武芸の演技を稽古してもらった。武芸演技は弾詞になく、評話の売りだが、武術と演劇の型の振りを、評話に運用する。かくて、目にも訴える説書を創造したのである。¹⁹⁾馬の鳴き声から疾走する音、また各人物の声色、様々な笑い声。各人物

を演じ、同一人物でも違った環境の中で演じ分けたという。この頃に流行りだした説書の劇手法吸収を、弾詞の方も影響を受けて、語りに重点を置いていた馬如飛派の『珍珠塔』も、時代とともに各役柄の型の芸を受容した。

評話には、動き回らず話芸だけで鑑賞させる「静功(陰功)」に対して、椅子から立ち上がって武芸の型を見せる「大開門」があるが、筆者は、後者を蘇州の評話家に多く見た。兆麟は跡継ぎがいなかったが、弟子の張玉書が立派に継承したという。ただ、兆麟の話芸本体について、言葉尻の「収音轉角著しく鼻音に走り、聲を納める處が往々模糊として何を言つてゐるか解らない。…三国志中の大英雄大豪傑の口吻を寫し出すのには甚だ不適當である。彼は最初新世界に在つて、素晴らしい魅力は現はしたものだが近來頓に影が薄くなつたのも道理である」としている。兆麟はまだ三十代半ばで円熟してはいなかったが、すでに著名であったことを知る。

紅梅は次に、兆麟と異なる芸風の朱春華を挙げて、「之は極めて穩やかな藝風で、決して疎暴な口調や身振がなく、然かも滑稽洒脱に富んでゐる」と、過去の名人を称えている。上掲「系脈表」p.355には朱春華の名が確かにあつて、それによると、春華は陳魯卿の弟子で許文安の師と位置づけられている。その文安

(一八五五年頃の生まれ) は既述のごとく兆麟の師だから、春華はすでに舞台を去っていたと考えられる。紅梅が挙げたこの春華、周派の周桂笙や方振寰、また朱幼良と朱春颿(帆)は上掲「系脈表」p 355に名を見るだけで、周鏞江は名すらもない。

さて、次は「水滸伝」の「水滸読み」である。姚氏父子をまづ取り上げる。上掲「系脈表」の「水滸」p 359を見ると張漢民を開祖としていて、婿に出た実子姚士章と沈鴻祥ら四人の弟子を挙げている。「後四大名家」唯一の評話家・姚士章は、「小魯智深と言はれた丈あって、此親子の水滸は手に入つたものである」と褒めている。芸風は、「崑劇」の將軍や荒武者役の芸を取り入れたもので、荒法師の魯智深を彷彿とさせる演技だったと思われる。また、「其脚本は無錫の儒者楊某に依つて改訂されてから三国と雙び立つ立派なものとなつた」とあり、やはり紅梅は説書の価値の第一を練られた言葉に置いているから、文人の手が入った作を尊んでいる。

直弟子の王效松とその子の釋松は、「餘り感心出来ぬ」と評價が低い。姚士章の兄弟弟子・沈鴻祥の弟子が、黃兆麟にも稽古をつけた何雲飛で、中年から評彈界入りした雲飛を自己流だったが、「後に無錫の沈雲章の後水滸傳脚本を得るに及んで名聲一時現はれた(姚士章の水滸は石秀殺山まで終り、沈雲章

の水滸は三打祝家莊より初め大名府に至つて終る。故に前後水滸と名目を別つ)」と述べて、士章が「前水滸」、雲飛は沈雲章の「後水滸」を読んで名を揚げたという。ただ、紅梅が、「餘りに穿鑿し過ぎ」て、「二回の内に十中の九分まで、概白(餘談を入れて布衍すること)で埋められ」、「彼が好く令名を保持する事が出来ぬのもその譯だ」、しかも「完くの虚構」もありませ、「原作者施耐庵に背く事夥しい」と難ずる。だが、歴史の蛇足は聴衆が興味をもつので、「偶然之を聞くと非常に珍しく面白く感ずるが、好く好く聞くと段々檻樓が出る」というわけである。さらに、雲飛の欠点を、他演目の同類場面の演技を「其儘盗んで來」て演じていると、説書の類似場面の借用を難じている。

じつは当時の「水滸読み」を、紅梅は「二十餘名を下らず」といい、盲目で常熟にいた名望家の息子王季臣を称讃している。「其脚本は曾て徐少達太史に依つて添削されたもの」と、文人の加筆を評価すると同時に、「王は單に國學上から此書を説くのではない。別に立派な本領もあり見地もあるのだ。彼は今日説書界の明星と推獎さるゝのは當然の事である」と持ち上げてゐる。残念ながら、今日季臣に言及した資料は少なく、「常熟評彈史話」p 190に、虞山出身で、萃和社に所屬していた

とあるにすぎない。¹³⁾

最後に、紅梅は評話の他の演目に言及して、どれも似たりよつたりと類型化に食傷を感じてか、「三國水滸の二書を除いては他に二も取るべきものはない」と斥け、当時口演されていた「岳伝」、「小三国」、「金台伝」、「小水滸」、「英烈」、「鉄冠図」、「五義図」、「緑牡丹」、「五虎平」などの演目を「未だ完く尚二者の範疇を脱してゐない」と、連ねるだけだが、ここに當時流行の評話演目がわかる。日本人の紅梅には『三国』『水滸』がなじみで、深く理解できたのかも知れない。談白英の『封神演義』の「封神榜」や黄石君が演ずる「西遊記」など旧来の物も、「孰れも子供瞞しの催眠歌」と酷評した。とはいえ、程鴻飛の「新作」探偵物も「全然説書を脱線して」おり、鴻飛の弟子「朱少卿の鄂州血史は更に更に人を愚したものと蔑む。ただ、『鄂州血史』のような、辛亥革命を題材にした時事物が口演されていたことは、「演説」が流行した時代の産物として、留意すべきであろう。

四 彈詞の曲調とコトバ（原題「唱白と流派」）

一三〇一七頁

この節はほぼ前掲の「説書閑評」を和訳したもので、以下、要約する。一九世紀前半「前四大名家」は弾詞の演唱に意を注いでいたが、後半には、「唱は行き詰まり」「後四大名家」の趙湘舟が、「崑劇」の役柄別台詞回しを「斟酌し、男女老若善惡などに就いてそれぞれ説白の遣ひ別けをした」と述べ、それに続いて姚士章（評話）・王石泉らが「更に更に勉強改善したので遂に現代の説白（演唱を除いたコトバ）が完成された」としている。かくて、評話は日本の講談と違い、多く演劇の説白を入れ、また各役柄の型も吸収することになった。

そして、当時「説白は官白、私白に総別される。官白は寒暄、叙事、感懷、私白は挿科、打諢、襯托等の説き方である」と「説書閑評」を引いている。今日では台詞を「官白」、事件の経緯・人物や情景の描写・人物の心情吐露などの説明部分を「私白」（「表白」と称して、必ずしも一致はしないが、紅梅が何雲飛のところで、「襯白（余談を入れて布衍すること）」と、今日「私白」の「補白」を「襯白」と呼んで分類している

から、約百年前に語りに重要な「白」の分析・体系化がなされていたことを知るのである。

次に演唱の部分については、初期の兪調と馬調の二大曲調を挙げる。^{②1}「前四名家」兪秀山の「兪調」は広音域で、各字を引き延ばし、裏声を交えて宛転と節を回し下降する。その演唱は高雅な崑曲に似る。馬如飛の「馬調」は、各字や節尻も引き延ばさず、叙唱体でテンポよく明快に演唱する。伴奏は演唱の間奏として兪調が琵琶、馬調が三弦を使っていた。

兪調の趙湘舟が「天性の甲高を自慢に、高ければ高いほど好いと思つてやつてゐた」と「説書閑評」の原文を引き、紅梅は「それが却つて聴巧者から擯斥される處となつた。畢竟高くて堅い聲は、低くて軟い聲に及ばぬものである。今の謝品泉の調子は之れである」と、謝品泉の甲高い演唱を斥け、「低くて軟い聲」を尊んでゐる。それ故、王石泉は「音量が少く、且つ高調子が出なかつたので、自来調なるものを發明し、忽ち兪忽ち馬というやうに自家獨特の調子はなかつた。今の説書家は大概此種のやりかたである」と、再び「説書閑評」を引き、「近頃唱を以て名高い朱耀笙も亦音量が少ない。…他人の長所ばかり聴き取つて之を模倣し、遂に唱將軍とさへいはるゝに至つた。之れ自来調中の尤も傑出したる者である」と、当時、自作の曲

調ではなく、自分の喉の条件に合わせて諸曲調を借りて演唱することが流行していたと知る。こうした方法は、以後暫く続くが、「説書閑評」は王石泉が「自来調」の創始者だとしている。

兪調は音域が広く、地声「陽面」が少なく裏声を多用するので、「小陽調」と呼ぶ。さらに、紅梅は附加して、「小陽調の中に別に一派がある。鬼陰調といふ。之は張洪濤が創めたもので、朱品泉之に依つて名を爲し、今現に陳子祥、張福田等が唱つてゐる」とある。この「鬼陰調」の「陰」は「陰面」、つまり裏声の意味があるが、紅梅はその特徴を、裏声で「一々調子が當嵌らなくとも、出の聲を強く終わりの聲が軟くさへ行けば、すべて能事終われりとしてゐる」と蔑み、「高調子を一度やり損うと、幽霊の叫びのような聲になる」といい、「専ら女藝人の爲に作つたもの」と聞いたとも述べる。^{②2}陳子祥が娼妓演唱場の跡の書場に招かれたのも、偶然とは思われない。それもあつてか、「之は説書中でも尤も卑しいもの」と非難している。ともあれ、夏史・易辰「彈詞曲調試論」^{②3}にいうごとく、「自来（自由）調」は發展せず、後世の名人達は、既成老旋律を改良・發展させて新しい旋律を形成し、流派を興した。同時に、兪調の節奏もあげ、馬調の叙唱体に裝飾をつけ、双方が相互に影響し合つた。また三弦と琵琶の伴奏も高度化して、彈詞芸術

の新たな黄金期を迎えるのである。

また、その他「陳調」、「費家調」、「銀紋絲」「剪剪花」「啄木鵬」等々の曲調が、特定の役柄に配される演唱形式も形成された。例えば、崑曲の「点絳脣」は武將・荒法師に用いられる。また、紅梅が「下流社会の唱」として「鈕州調・海審調」を挙げたが、原文の「丑角」は道化の唱で、「孩児調」も「説書閑評」の原文で「耍孩児」とあり、これも誤訳である。それに注記して、『珍珠塔』で方卿が出世した後、自分を軽蔑した叔母を訪ねて見返すとき、門付けの「道情」乞食芸人に身をやつして歌う曲調とあるからだ。紅梅が、「初心者が尤も入り易いもの」と述べているから、そこで、道教系語り物「道情」の節が簡単であったことも知るのである。

五 説書組合と学校（原題「團體と學校」） 二〇～二二頁

紅梅は蘇州の評彈組合「光裕公所」について述べる。やはり上掲「説書閑評」p.203から取っているが、文意を曲げて加筆している。「嘉道年間に至つて説書の興行振りは極めて卑鄙に陥り、女藝人など交じえて出演したので乞丐頭から附込まれ節季

毎に必ず幾分かの金錢を強請された」、紅梅は附加して、「馬如飛の師、桂秋華出づるに及んで、女藝人を交じゆる者を混槽と排斥し、之れ無きものを清槽と稱揚した」と、原文にない「女藝人」を故意に入れている。また、功労者の桂秋華は未詳で、馬如飛の従兄「桂秋榮」としても光裕公所との関連史料はない。

因みに光裕公所は、「光裕社出道録」（注12、p.186）によると、一九二九年に「光裕公所一百五十年紀念冊」を出しているから、逆算して乾隆四十一年（一七七六）の設立とされる。因みに、元の場所が、一八六〇年に太平天国軍に壊され、一八八四年復興するまで移転していた。²⁴ 前文に続けて、「集会所を設け、組合の規約を作つて大に廓清する處があつたので乞丐等の強請も歎み、漸く士人の間に認められるようになってきた。而して馬如飛等其後を繼ぎ」とあつて、この集会所が光裕公所で、その「組合の規約」が重要であつた。一九〇六年の『光裕公所改良章程』（『蘇州評彈旧聞鈔』p.130に転載）の第一条に、「凡そ同業の者で女説書と伍した者、抑も女の弟子に伝授したり隠れて営業した者は、調べ上げて協議の上処罰する」とあるからだ。「改良」とあるから、以前に本の「章程」があつたはずで、紅梅もこうした觀念を折り込んだのであろう。前掲「対馬如飛

応如何評価」(注10、p.72)に、馬如飛が光裕公所を再建したと、如飛の功勞としてゐる。また、阿英『女彈詞小史』(注13、p.188に転載)によると、「女彈詞」は確かに一九世紀前半に常熟から起こつて、世紀の後半に入ると、蘇州で盛んになったと述べてゐるし、同じ頃、「女彈詞」は前掲の『滬游雜記』にも「青樓二十六則」と上海でも娼妓の芸と見られていたのである。「更に益々刷新を計つて光緒二十八年(一九〇二)説書學校設立の企てもあり、且つ慈善事業を興し、大に世間の受けを善くした」は、原文を翻訳してゐる。易水「解放前專業評彈組織」には、この裕才學校の設立時期は、一九〇七年と五年後にする。同文では、一九一〇年互助会「益裕社」を設立し、一元の入会費を払い月二角を納めると、入会期間にかかわらず死亡時期に五十元―百元をもらひ「義冢」に埋葬されたところ(注25)。なお、光裕公所は民国元年「光裕社」と改名する。被差別民の子弟は往々學校に拒否されたから自弁で開校したり、慈善事業をし、遊里と差別化の標示として「社」と称すること、この時代の現象だった。

この後、光裕社から離脱した芸人が新興の上海に新しい組合を結成する話になり、「説書閑評」の原文は「謝少泉が上海に行つて、程鴻飛、沈廉舫などと「潤裕社」を創つた」とあるだ

けなのに、紅梅は内幕を漏らしている。「謝少泉も其社員の一員となつていたが、叔父品泉の爲に嫉視せられ常に壓迫を受けてゐたので、心中不平鬱勃たるものがあつた。恰度其頃少泉は嘉興に赴き、沈猶庭(楊小亭の師)と競演し之を敗つた事がある。其後裕才學校開校せる、や、沈は其校長に任命されたので、少泉に對する怨みを晴す時來れりと、口を公憤に藉りて大に彼を排斥した。又叔父品泉も少泉とは犬猿の間柄であつたから、之れ幸いと一處に成つて彼の退社を迫つた」とし、さらに、品泉の情婦(現在の妻)が少泉と「醜關係を結」んだことも、怨みの種だったと芸人同士の反目が、少泉の上海進出の原因の一つだと述べる。ともあれ、人氣の少泉は上海で、程鴻飛や沈廉舫らと「潤裕社」を興し光裕社と對抗した。成立は易水の同文に一九〇〇年―一九一二年の間と定説がないという(p.218)が、時代が近い「説書閑評」(一九一九)に、「僅に七八年の新団体」とあるから、民国成立前後と考えてよいだろう。

しかし、その後、沈猶庭が死去(一九〇九年)し、「光裕社長及び裕才校長は王授卿の襲任する處となり、授卿は少泉が外に在つて勁敵となる事を憂い、人を介して彼の歸社を勧告した」とあつて和解したようだ。ただ、授(綬)卿が会長になつたのは民国元年(一九一二)ともいわれるので、わずか数年後

の一九一六年、少泉は世を去った。そして、「説書閑評」には最大勢力の光裕社に新興の「潤裕社」は「毫しも引けを取らぬ」の部分を引き一方で、紅梅が、「唯近年程鴻飛が獨行獨斷の振舞あるより朱酉山は會費を出したり金を出したりする事は御免だなどと言つてゐる。又同社の元勲沈廉舫は既に死し、郭少梅等は私に獨立の野心を抱いているので、議論常に紛々、又成立時の團結を見る事が出来なくなったのは遺憾千萬である」との複雑な内情も告げている。

その他、原文から、同義社と無錫の光裕分社（光裕社とは無関係）を外して、鶯湖楔社・寛裕社・華和團（萃和社の誤写？）の三団体を挙げるが、「撰り屑ばかり」と価値していない。

六 評彈の通弊と特徴（原題「あらさがし」）

二二、二六頁

中国語には仮名表記がないので、「唯師匠傳來の話を耳から口へと謄舌り立てゝゐるのだから」と、脚本はあつても話芸は口伝で、発音の近い漢字と間違ひ、勝手に辻褄を合わせていると、その弊害を述べる。また、登場人物同士の時代不一致、真

面目な人物にわざと笑いを取るため下品なことをいわせ、逆に淫婦を烈女のように語つたりして面白がらせ、全く節度がないと、紅梅は歎いている。

紅梅は「あらさがし」というが、語り物芸能の通弊とはいえず、またその特徴をも表している。つまり、物語の内容にある構成・人物に共通の型をもっていることは、いかなる語り物にも共通することだ。あるいは、説書と関係の深い中国古小説にも通じた点がありそうなので、紹介しておこう。

説書は端役の名前を使い回して、例えば、門番は「香錫蘇」か「無常鬼」の名で、彈詞はお嬢様の恋愛物が多く、必ず侍女が出るが、秋香、春香などと「香」の字が付いている。また説書にはなぜかよく山西商人を出してくる。評話には、「必ず一軍師が出て来る。三国の孔明、水滸の呉用…、等」。少々間抜けな將軍が現れる。「三国の張飛、水滸の李逵、岳伝の牛皋…、等」。それで、「多数の人物は煎じ詰めれば」数人の役に帰納できる訳である。紅梅はさらに、説書の内容の類型を「十八個半關子」という言葉で示している。挙げられた十八類は、以下のとおりである。

「千金の小姐（秘蔵娘）花園に遊ぶ」「難に落ちたる公子、状元に中る。（科擧に及第）」「小奸、良家の女子を搶う」「惡僧不

軌を謀る」「吃人參果（人に善事を施す）」「賊官良を誣ゆ」「小奸私に造る風月樓」「義賊割鬚盗印（義賊鬚を剃り官印を盗み、官吏となる）」「欽差（天子の使）私に察訪を行う」「誤つて驛美堂を撞き破る」「義賊來り救うて、救い出さず」「師父或は師兄に請うて幫同して該寺を破らん」「惡僧は地窖門より逃走せり」「奸臣權を弄して忠良を害す」「家を抜け出て被捕の難を免る」「法場を劫す」「終身を私訂し冒名（偽名）して科に登り（官吏試験に及第）蓄を平らげ功を建て、仇を報ゆ大團圓」「武場を設立」

そして、「現在の説書は此種のキマリ文句を以て満たされてゐる。凡そ何書に拘らず。此十八門を脱出する能はず。：一字一句をも易へぬとは笑ふべし」と結んでいるから、紅梅は「あらさがし」というよりも、文字で練り上げた文学的なものを期待し語り物芸が共有する特徴を受け容れなかったと見える。

七 組合の行事と資格（原題「説書の神」）

二六・二九頁

光裕公所（社）は蘇州の説書芸人を統御していて、会員だけが書場に出演できる組合組織であつた。紅梅が説書界の守護神

「三皇」をまず説いたのは、その誕生日（旧十月八日）と、旧正月二十四日との年二回、説書界への入門と昇進の審査があつたからだ。⁽²⁶⁾ この三皇は諸説あり、紅梅は「馬如飛は之を神農（漢方の神）と謂つてゐる」、そして、「憂鬱の症あるに因り、心曠神怡するに非んば瘳す能わず。乃ち歌詞を編して以て之を娛しましむ」を引いて、彈詞を樂しめば心が癒されると解している。公所は、あと一日、「七月十五日には特に僧、道を延して法事を行ひ、斯道先輩の靈を慰めるのである」とお盆の日を挙げ、年三回、会員全員が参集することになっていた。

次に、その入門・昇進に関してだが、紅梅の文言は少しく混乱しているので、それを整理してみた。会員の資格を得るのを「出道」という。一定程度のレベルに達した後、師匠に連れられて先輩会員達の集会（茶会）で顔見せをする。紅梅は「出道」に際し、「錢七千二百文を公所に納むべし（但し納めたからと言つて此金は公所に没収されるものではない。即ち其人死後の葬式費用に充つるのである）」、さらに「偕て此金を納めれば、父兄及び師長は仲間の者を集めて当人の披露をする」とある。さらに、「之は公所の茶室の仲間入りをするので、此處に會合する者の一切の茶錢を一回丈け支拂」う。別称「出茶道」。同意が得られると「出小道」、即ち正式会員となつて、舞台に

立てるのである。

次の「出大道」とは、さらに長い稽古と実践を経てから、權威ある師匠達の承認を得た者である。かくて、弟子を取ることが許される。⁽²⁸⁾「大道」については、「更に大牌小牌の區別がある」としているが、紅梅の説明は曖昧である。周玉泉「談芸録」によると(注9, p121)、公所には机二台ほどの面を持つ赤松が描かれた「大牌」と、同じく赤松の机一台半大の「小牌」が横に掛かっていたと述べ、さらに「出小道」は名が書かれず、「出大道」も初めは小牌で、五年過ぎてから大牌に名が記されたという。その際、「隆々たる親方株になり、酒筵を設けて仲間の者を御馳走し所謂出大道酒」をしたという。以上要するに、「出小道」入門→「出大道(小牌)」弟子が取れる→「出大道(大牌)」大幹部と進むようになっていた。因みに、「光裕社出道録」は、同治五年(一八六六)から民国三十三(一九四四)までの出道した芸人の記録である(注12, p188, 212)。

会費について、紅梅は「大牌は毎年錢二千百文、小牌は錢七百文を公所に納め、其經費に充つる定めである」と記す。周玉泉は前文で、「大道」を一日一元と述べている。因みに、彼が入門時に支払ったのは、百元であった。年間だと、この三倍を

超えるが、妥当か否か未詳である。儀式は「司年」の役割で、他に「司月」がおり、老幹部四人で構成されていると、紅梅はいう。ともあれ、光裕社は上掲の易水によれば、一九三一年「呉県光裕説書研究社」と数回改称して、一九五九年解散した。蘇州評弾の芸人を守り、その話芸の継承を絶やさず、組織を維持していたのである。

むすび

紙幅の関係で、「脚本と流派」及び末尾の「春典(業界用語)」は割愛した。前者は前節と重複するところもあり、後者は和訳辞典だからである。非文字文化の「説書」は紅梅にも「大道案」であったから、記述も疎略に思われる。それでも、紅梅の稿は、自らが生活の一部として親しく見聞きしたものの記述で、言及した芸人は百九名に及ぶ。音声言語芸能の研究もなかった当時、日本人に伝えるのは、至難の業であつたろう。紅梅が思案した筋立てなので、拙稿はその意図もあろうから、彼の稿の順にしたがって述べた。

評弾史研究もかなり進展しているが、文字史料は豊富ともいえず正確との確証もなく、老芸人の回想に頼つているところも

多い。紅梅の生活した民国初期の評彈界は、その老芸人のさらに師匠の時代で、紅梅の言説はその空白を埋める意味もあり、重要である。筆者の評彈に対する理解は決して深くないので、最も完備した『評彈文化詞典』を是々非々で参考にしたが、紅梅の言及した内容で、この詞典に含まれていなかった人物・事柄も少なくなかった。それは、評彈史の遺漏がまだ存在するということである。

拙稿の目的は、既述の如く一九二一年以前、民国初期の隆盛期、ラジオの「空中書場」も始まる評彈黄金期以前の説書界の様々な状況を把握することである。今日に繋がる有力な流派が形成される前の事柄は、触れる論致が少ない。紅梅の稿は豊富な情報を包含しており、拙稿はそれを掬い取って、初歩的な吟味を行った。筆者の浅学ゆえ、初探の域を出ないものとなり、また紙幅の関係で十分尽くせない部分もある。だが、拙稿が優れた江南の説書という非文字文化研究の一助となれば幸甚である。

筆者が香港留学中、蔣月泉などの歌をレコードで聴いて彈詞の虜になり、呉語を習ったのは、一九七〇年前半のことである。帰国後、新内の岡本文弥師から名師の三弦を賜り、八〇年代には上海・蘇州で直接鑑賞する機会を得た。にもかかわらず

紹介の短文を一篇書いたにすぎない（注29）。改めて、紅梅の熱意に頭が下がる思いだ。

おわりに、兼任講師を担当したご縁で、こうした非文字文化に関する論致を取り上げて下さった國學院大學の諸先生に深くお礼を申し上げたい。

二〇一六年八月

注

- (1) 郷下人『小説霸王』（第五七期）（周良編著『蘇州評彈旧聞鈔』江蘇人民出版社 1983）転載（p201～203）。
- (2) 王廷鼎『紫薇花館』（『蘇州評彈旧聞鈔』転載（p121～122））には、一八六八年頃、上演は、昼が三時～五時、夜は九時～十一時とある。
- (3) 「百余年來蘇州市書場設置概況」（『評彈芸術』第九集（p201～202）中国曲芸出版社 1988）。
- (4) 倪萍倩「上海書場發展概況」（同上、第五集p245～251、1986）。
- (5) 羅叔銘「閒話書場」（同上、第九集p262、1988）。
- (6) 徐雲志口述「《三笑》的整理和加工」（同上、第一集p93、1982）。
- (7) 「上海案内（第七版）」（金風社 1917）（p145～6）「書館」に、主眼は彈詞の唱篇を歌う娼妓「唱書」にリクエストをしてどう近づかうという内容である。隆盛時には二百人もいたが、今は山西路の「小広寒」だけとある。
- (8) 漢語大詞典出版社 1996。
- (9) 周玉泉「談藝錄」（『評彈芸術』第七集p113 中国曲芸出版社 1988）

7) から、紅梅が紹介しているのは「漢口路」に移転した後の「新留春園」であろうと思われる。そこで、「表」には一九一八年頃営業とあるのは「新留春園」で、「留春園」はさらに早く営業していたことを知る。

(10) 匡雲声「対馬如飛応如何評価」(同上、第二集p69、1983)。

(11) 倪萍倩・周雲麟「馬如飛軼聞」によれば、この人気二演目とも丁日昌の禁演演目になっていた(同上、第九集p162、1988)。

(12) 「光裕社出道録」(同上、第八集p191、1987)。

(13) 顧鴻希・浦熙炎・孔萍「常熟評彈史話」(同上、第九集p196、1988)。

(14) 上記(注13)p196には、蘭庵が『春声日報』の編集をし、『戲雜誌』に筆名で投稿したとある一方、蘭庵が日本の占領下職を得ていたため殺されたこと、そのためか弟も医術に転職したなどが記されている。

(15) 『評彈芸術』(第五集p203、1986)。

(16) 同上、第二集「『三笑』開創了彈詞的喜劇風格」(p57、p59、1983)。

(17) 竺少華点校本「『三笑』(岳麓書社 1987)と吳語方言の附録が付いた曹中学整理本(上海古籍出版社 1990)があり、後者の「前言」p9、10に諸本について言及している。

(18) 原文は1931年9月22日『新聞報・快活林』(『評彈芸術』第五集に転載p242、1986)。

(19) 「黃兆麟」(『評彈芸術』第四集p245、p248、1985)。

(20) 周良主編『評彈知識手冊』(上海文芸出版社 1988)p38では、姚御章とする。

(21) 上掲の葛元煦「滬游雜記」(1876)p128、129卷二「青樓二十六則」に「俞(虞)調」は本題の前の小篇「開篇」を琵琶伴奏で演唱する。

随分前からのもので細やかで物静かだ。「馬調」は物語を演唱するもので、同治の初期の馬如飛が創った曲調で余韻がなく話しているようにだと述べている(上海書店出版社 2006)。

(22) 「上海書場發展概況」(注4)に、清末に娼妓の演唱が人気を得たが、民国に入って衰えたため書場に換えた広東路の天樂窩に最初に招かれたという(p246)。

(23) 『評彈芸術』(同集、p76、p83、87)。

(24) 「光裕公所重建宮巷第一天門三皇祖師殿碑記錄」(1899)、『蘇州評彈旧聞鈔』(p47転載)。

(25) 『評彈芸術』(第九集p217、1988)。

(26) 易水の同上文。および周玉泉「談藝錄」(同上、第七集p121、1987)。

(27) 「蘇州評彈旧聞鈔」(p65)王綏卿「識三皇像」に「同治四年(1865)、馬如飛は漢方薬界が信奉する神農、黄帝、伏羲を三皇に指定したと書かれている。

(28) 周景標「徐雲志の芸術道路」(『評彈芸術』第一集p158)。

(29) 「中国の語り物―評彈について」(『季刊邦楽』p64、68、邦楽社1986)。